

「人の健康を守る」という観点から自分らしい活躍フィールドを見つけてほしい。

「将来的にどういうチャレンジをしたいのか」「社会ニーズと照らし合わせて考え、自身が医療人として貢献できる場を見つけたい。そして「健康」をキーワードに、薬学の知識を活かして活躍できる場をさらに広げていくってほしいと期待しています。」

愛知学院大学
薬学部 教授

佐藤 雅彦先生

北里大学大学院薬学研究科博士課程を1991年に修了し、薬学博士を取得。国立環境研究所主任研究員、岐阜薬科大学助教授などを経て、2006年に愛知学院大学教授に就任し、現在に至る。衛生薬学講座を担当するとともに、医療生命薬学研究所所長も兼任。



「健康」をキーワードに無限の可能性に挑む

就職に際して、薬剤師の資格を活かして働くという前提に立った場合、薬学生は比較的恵まれた環境にあると言っているでしょう。そのせいか先々のことを深く考えず、給与など待遇面の条件のみの比較で、安易に進路を選択する傾向も一部に見受けられます。また現在は、「かかりつけ薬剤師・薬局」が叫ばれ、地域包括ケアシステムの構築に向けて制度設計が進むまさに過渡期。変化をほらみ、将来の見通しがつきにくいことも、近視眼的な選択に拍車をかけているのかもしれません。

しかしそんな時だからこそ、目先のことにとらわれず、自身の立ち位置を明確にすることが求められるのです。長期的な視野で、社会ニーズに照らし合わせ、「将来的にどういうチャレンジをしたいのか」、自身と深く向き合ってほしいと思います。

薬学の範囲は広きにわたりますが、その最終的な目的は「人の健康を守る」ということに尽きます。薬の成分や構造式から起きうる可能性を予測したり、統計を分析したりすることは予防医学にもつながるもので、「生命総合科学」もしくは「健康科学」と言い換えてもいいかもしれません。

超高齢社会へと進む中で、「健康」への社会ニーズは高まる一方で、薬剤師を求めるのは医療現場にとどまりません。「健康」をキーワードにすれば、進路の選択肢は「気に広がり、無限の可能性を秘めていると言えます。ぜひ薬学生の皆さんには「社会への貢献度」と「自分の本当にやりたいこと」

とがマッチする、自分なりの活躍のフィールドを見つけてほしいと切望しています。

学び続けられる環境でより貢献度の高い医療人へ

視野を広げ、本当にやりたいことを見つめるには、学業の傍ら、学生にとって最も身近な情報源である大学教員にもっと積極的に働きかけ、様々な情報を引き出すとともに、インターンシップなどを活用し、現場で働く薬剤師の声を聞くことが大切です。せっかく6年もの時間があるのですから、これを有効活用しない手はありません。当大学としても、早期体験学習を導入しているほか、企業を巻き込んだ「寄付講座」の設置を検討しています。

これは複数企業から講師を招き、低学年から様々なテーマで講義をしてもらうというものです。低学年のうち現場の生の声を数多く聞き実態を知ることが、学生、企業の双方に意義あることだと考えています。

また、薬剤師として働きながら勉強できる環境があることも進路を決める上で重要なポイントです。特にこれからは病院だけでなく、薬局など様々な分野で活動している薬剤師も博士号を取得し、学会発表や論文を通じて、自身の活動で得た知見を発信することで地域医療の質向上に貢献していくことが求められる時代になります。

薬学を学んだ者として、常に「人の健康を守る」ということを基点に研鑽を積み、ステップアップし続けてほしい。そして社会に貢献できる医療人として活躍する場をさらに広げていくってほしいと期待しています。